

心電図・心エコー検査を受ける幼児へのプリパレーション

キーワード：プリパレーション、心理的準備、幼児期

北2階病棟 井口元子

I. はじめに

近年、小児看護では子どもの権利擁護などの観点から、プリパレーションの必要性が高まっている。幼児を対象に行われた、検査を受ける子どもの研究では、検査についての絵本や写真を用いて説明を行った結果、検査をスムーズに受けることができたと報告されている。

今回、川崎病で心電図・心エコーの検査を受ける幼児を受け持ち、パンフレットを用いた看護介入（プリパレーション）を行った。この介入の効果と今後の課題を明らかにすることを目的に本研究に取り組んだ。

II. 概念枠組みと用語の定義

●プリパレーション：子どもの病気や入院によって引き起こされる心理的混乱を最小限にし、子どもや親の対処能力を高めるケア、心理的準備。

●CHEOPS（行動観察的アセスメント）：啼泣、顔の表情、子どもの言葉、胴体、触覚系の活動、両足の動きの6つのカテゴリーに分けられたスコアリング。点数が低いほど良く、最高4点、最低13点。

●子どもの痛みやストレスは、情緒的要素、環境的要素などが複雑に影響し、痛みの表現を修飾しているため、十分に評価することは困難であり、子どものストレス評価法は開発途中である。このため、子どもの認知発達を理解したアセスメントが必要といわれており、痛みやストレスをホリスティックに評価するためには、いくつかの方法を組み合わせることが重要といわれている。

III. 倫理的配慮

保護者に研究の目的、協力をお願い、拒否できること、プライバシーを守ること、研究が個人を特定できないようにして論文や学会に発表する場合があることを、文書と口頭で説明し、同意を得た。

IV. 研究方法

1. 研究デザイン：事例研究
2. 研究対象：川崎病で入院し、心電図・心エ

コーを受けた4歳の患児とその母親。

3. 研究期間：平成18年11月4日～11月20日

4. 研究方法：

- 1) 心電図、心エコーのパンフレット作成
- 2) 子どもと母親を対象にプリパレーションを行う。

3) パンフレットの内容：人形が検査を受けている写真を、キャラクターが何をしているかや、子どもたちががんばってほしいことなどを解説している。「君もがんばれるかな」「がんばったらキラキラシールを貼ってもらえるよ」ということが最後に書かれており、保護者へ向けた協力の一文が書かれている。

5. データ収集方法：プリパレーション前・検査後の半構成インタビュー、入院中の言動、看護記録から情報収集を行った。

6. データ分析方法：

- ①プリパレーション前後の患児、家族の反応を捉え、プリパレーション前後の患児の言動の変化を観察比較分析、評価する。
- ②CHEOPSによるスコアリング、分析。

V. 看護の実際

1. 患者紹介

患者：A君、4歳男児

経過：2年前、5ヶ月前に川崎病で入院の経験があり、今回3回目の川崎病での入院。心電図・心エコーの検査は2回目の入院中、外来フォロー中も受けたことがあり、今回の入院時の検査も流涙しながらも受けることができていた。性格は「やると決めたことは泣いてでもやる」など、意志がはっきりとしている。

3回目の川崎病であり、疾患に対する家族の不安が大きい。また、付き添いの母親が妊娠8ヶ月で身体的・精神的負担が大きく、表情はやや固い。

2. プリパレーション実施前の反応

11/6（入院3日目：川崎病 病日）A君は川崎病の急性期症状が顕著に出現していた時期

であり、 $T=39^{\circ}\text{C}$ 台の発熱もあった。持続点滴中。

CHEOPS：「8点」説明の補足により検査に協力できるが、表情はしかめっ面で流涙していた。言動は「待って！自分でするから触らんで！」などと強い口調で訴えていた。胴体や触覚系の活動、両足の動きは特に問題とならなかった。

事前に母親からA君は心電図・心エコーの検査を受けることができるという情報があったことから、看護師は心電図・心エコーの検査があることを「胸にシール貼ってする検査と、少し暗い部屋でやる検査したことあるかな？今からその検査に来てくださいって電話がかかってきたから一緒に行こうね。」と口頭で簡単に説明すると、A君はうなずき、母親と一緒に歩いて検査室へと向かった。疾患の症状から、頸部の疼痛が強いこと、倦怠感、不機嫌もあり、表情は険しかった。同時に腹部、頸部のエコーも一緒に行われたため、検査中「何見てるの？」などの言動があり、看護師が「首とかおなか痛いなから、どうなってるのかなって調べてると。」などと説明することで納得していた。また、母親からは「今はどこの何を調べてるんですか？ぜんぜんわからない。」などの言葉が聞かれ、不安気であった。検査中の一定の安静は守れており、A君のペースに合わせて検査が受けられるように関わった。

3. プリパレーションの場面

11/6日夕方

A君の母親に、検査や処置をする場合にA君の漠然とした不安を軽減できるようにや心の準備ができるように関わりたいこと、A君が頑張っていることを認め、A君の自信につなげていきたいことを伝え、パンフレットを用いたプリパレーションの承諾を得た。パンフレットを見た母親からは、「写真で実際にどんなことをするのか分かっていいと思う。」という言葉が聞かれた。A君は急性期症状で、不機嫌や倦怠感もあったため、比較的機嫌がいい時に母親とA君で読みたいとの母親の希望があったため、解熱時や機嫌がよいときに母親に読み聞かせてもらうようにし、パンフレットを貸し出した。11/7 A君が解熱した時に母親と一緒に読んだということであり、母親からの情報で、A君は「あ、これAもしたね。」「この検査ががんばれるよ。」「Aも検査ががんばったから、キラキラシールもらえるのかな？」などの言葉が聞かれた。

4. プリパレーション後の反応

11/13（入院10日目：川崎病 病日）A君は

解熱しており、機嫌よく、点滴もしていなかった。

CHEOPS：「4点」顔面は笑顔で「Aこれできるよ。」「シールとゼリーつめたーい。」等と言ひ、余裕の表情であった。胴体、触覚系の活動、両足の動きは11/6と変化なし。

検査呼び出し時は看護師よりも先頭にたって検査室に向かうなど積極的であった。

A君はパンフレットの文末にある“がんばったらカードにキラキラシールをはってもらえる”ということ的印象的に覚えており、検査時にキャラクターのカードを持って行ったり、自ら「がんばったらシールちょうだいね」などと看護師に言っていた。看護師は検査後に約束どおりシールを渡し、A君に「すごいね！検査上手にがんばれたね。」と声かけをし、医師や他のスタッフ、家族にもA君ががんばったことを伝えた。A君はプリパレーション後にカードをもらってから、母親に「早く検査に行きたい」などと言っていた。また、採血などの他の検査でも、終わった後に「がんばったからシールもらえる？」と自らスタッフに申し出るなどしていた。

母親からは、「子どもが検査をするときに怖いという気持ちを少なくするために、写真つきで看護師さんが説明してくれることはとてもうれしい。キャラクターも好きだし、幼稚園でも登園したらシールを貼ってもらってるから、その感覚で検査もがんばれたと思う」という声が聞かれた。

VI. 考察

CHEOPSのスコア上、プリパレーションの実施前後での変化があったものは「涙を流さずに検査を受けることができたこと」、「積極的、肯定的な言動があったこと」であった。これら以外が元々良いスコアであった理由としてA君が経験したことのある検査で、この検査は痛くないという認識があったことが関係していると考えられる。

これまでの研究報告によると、子どもたちは病院について、感覚的に「怖いところ」「痛いところ」という認識があり、なぜこの検査を受けなければならないかなど、多くの疑問を抱えている。この疑問が解消されないまま退院した場合と、子どもに合わせた説明を行った場合とでは、子どもの対処行動、回復度、また、退院後の情緒不安や適応度に差があることを示している。

また、子どもは認知発達上、理解力に限度があり、入院によって多くの見慣れない環境や人々

に囲まれ、痛みや苦痛を伴う検査、処置、治療に対して不安やストレスは大きい。そのような子どもたちにとって、心理的準備は病気や入院生活をうまく乗り越える上で重要な働きかけとなるといわれている。

A君は入院の経験があり、心電図・心エコーの検査を受けることができているとの情報があったが、病状や突然の入院によって環境の変化があり、涙を流したり、何をされるのだろうかという不安や恐怖があったと考える。このような状況下にあるA君に、プリパレーションを行い不安の軽減努める必要があると考え、関わっていった。結果、A君がプリパレーション後、検査に対して積極的、肯定的な言動、行動があった。このことから、プリパレーションを行ったことによって、単に「検査をした」という認識から「大切な検査をがんばったら、シールをもらえる」という認識に変化し、A君が検査を肯定的に捉えるきっかけになり意義があったと考える。

プリパレーションを行うにあたっては、児の病状やタイミング、家族の協力が大切といわれている。プリパレーション前の母親の言動として、「何をみているかわからない」などの言動あったため、まずは母親が検査に対して理解できるようにパンフレットを用いて説明し、理解を得た。母親からの情報でA君がキャラクターを好きなことや、幼稚園に通いだし、シールを貼るなどということが日常的に行われているということから、A君の興味を引き出し、発達段階にあったプリパレーションにつながったと考える。

幼児後期の子どもは模倣と観察によって学習し、どのようにしたらいいかを自ら考えていこうとするといわれている。そこで、写真入のパンフレットを用いてプリパレーションを行い、母親と児に検査を具体的にイメージできる機会を意図的に作った。結果、A君なりに納得して検査を受ける心理的準備ができ、検査に対し積極的、主体的に検査に臨むという変化があった。これは、児が実際のものを見たり、「この検査は痛くないんだ」「がんばったらシールをもらえる」などのこのとがわかり、検査へのイメージができ、どうなるのかを認識して心理的準備ができたからであると考え。

このように、母親と一緒にプリパレーションの時期や方法を決めていったことはA君にとっての有効なプリパレーションを行う上で重要であったと考える。

プリパレーション後のA君は「早く検査に行き

たい」「がんばったらシールをもらえる」という反応があり、A君はキラキラシールをもらって自分ががんばった成果が見えることや医師や看護師にほめられることをうれしく思っていたようだった。

子どもは他者から「すごいね、よくできたね」と誉められたり、自分はできるのだという有能感（コンピテンス）を獲得することによって、自分を肯定的にとらえるようになると言われている。このことから、できたことを認める声かけを行ったことや、がんばった結果がキラキラシールとして残ることが、A君の達成感につながり、児の行動が協力的・積極的になったと考える。

このような経過でA君が無事に検査を受けることができ、成功体験を増やすことは、否定的な入院生活や病院へのイメージが少しでも肯定的なイメージに変化し、児のできる力を引き出すことにつながっていたと考える。

VI. 結論

1. 発達段階をアセスメントし、児、家族が検査に対して具体的なイメージがもてるように関わることで、不安の軽減につながる。
2. 発達段階をアセスメントし、児のがんばりを認め誉める関わりをすることは、小児看護において重要である。
3. プリパレーションを行うにあたって、児、家族の状況に応じた時期や手段を考えることが重要である。
4. プリパレーションは検査への意識を肯定的に捉えるきっかけとなり得る。

VII. おわりに

今回は一事例での関わりであり、患児の性格や理解力、患児の今までの経験も大きく影響していることが明らかになった。また、プリパレーションを行うにあたって、個々の発達段階やキャラクターのアセスメント、児・母親との信頼関係が重要であることを再確認した。

今後も症例を積み重ね、日々の看護に生かしていきたい。

《参考文献》

- 1). 田中恭子：プレパレーションガイドブック，日総研，第1版第1刷，2006。
- 2). 脇本澄子：安静を必要とする検査・処置を受ける乳幼児への援助—入眠処置をしないかわり—，小児看護，2003。
- 3). 繁田進：乳幼児発達心理学，福村出版，第10刷，2002。